IPT2024 第二次審查(入賞作品選出)審查講評

ビジュアルそのものの完成度が視覚を掴むだけではなく、このポスターは何を語っているのか、なぜこのポスターは心に響くのか。そして、そのメッセージはいまの時代に響くものなのか。受賞作としてふさわしいポスターを選ぶ中で、ポスターの普遍的な良さについてまで議論が及び、審査員同士が感覚を共有していった。濃密で刺激的な審査だった。

視覚が掴まれ、心が掴まれ、メッセージが届く。例えば、展覧会や公演などの情報ばかりではなく、政治的、社会的な背景から生まれるメッセージを発するポスターを読み込んでいくこともある。そして、1 枚のポスターが生まれる背景によっては、実現できる印刷のクオリティに大きな格差があるはずだ。資本的な背景の格差以前に、応募者が暮らす場の状況が困難に晒さられていることもある。

1枚のポスターに乗って、喜び、悲しみ、叫び、問いかけなど様々なメッセージが世界からトヤマに集まる。では、いいポスターとは?審査翌々日のIPTの授賞式・開会式で、審査員の一人、ディーン・プール氏は「物質としての存在を超えて、象徴的な残像として誰かの中に残るポスター」と語っていた。

◆ グランプリ A部門《世界は私たちのもの!》 シュペールテラン(フランス)

視覚を捉え、心を捉える、その総体としてのメッセージ性のあるビジュアルで、1 枚のポスターとして様々な水準を満たし、ポスターとしての普遍的な力がある。

未完成のように荒々しい色彩のレイヤーと、それと拮抗する柔らかな風景と道は、見る者がこれから出会う世界への想像を広げる。劇場のシーズンプログラムを伝えるコピー「世界は私たちのもの」を、見事に体現している。言葉を超えてイメージを喚起させる豊かさがあり、それは、理論や説明で尽くされそうなこの時代には、とても新鮮に映る。

◆金賞 A 部門《(望まない) 収穫物》ダーシャ・ボドルツェワ(ウクライナ)

ポスターの構成としてはオーソドックスであるが、争いが止まない現在の世界に、1 枚のポスターで投げかけたメッセージ性の深さが際立った。

「HARVEST(収穫物)」は、攻撃に使われる物と農耕の収穫物をアイロニカルに重ねて、生きること自体への打撃も想像させる。この風景がいつ、どこかは明確にされていないが、日常に唐突に降りかかる争いのイメージは、攻撃される側の弱さを伝える。例え小さく静かでも、考えることを促す力があるポスターには、声高なポスターにはない深さがある。

◆金賞 A 部門《P.A.N.G! パフォーマンス公演》(3 点組) アトリエ・テア・ベッケ&ベハ ーへ(フランス/オランダ)

フランス南西部のサン・ナゼールの劇場での、演劇やパフォーマンスのフェスティバルの告知ポスター。毎年開催されるプログラム告知3年分の組作品。継続的なクライアントワークをシリーズとして提示したとき、1枚で見るとき以上に内容とビジュアルの繋がりが見えてくる。感情と強さを巧みに混ぜ合わせたグラフィックには「視覚を掴みとる」インパクトがあるだけ

ではなく、シリーズポスターとしての完成度が抜群に高い。このフェスティバルが新しい表現 を切り開く実験の場であり、それを伝えるポスターもまた挑戦を続けるということだろう。

◆銀賞 A 部門 《H UM 人 N》(3 点組) 佐々木 俊(日本)

タイトルの「HUM人N」以外の文字情報は少なく、人の姿を凝縮したようなグラフィックそのものが文字のようにも見える表現は、新鮮で大きな魅力がある。人の姿そのもの、人と人との関係性等々が、言葉を超えた視覚のメッセージとなって見る者のなかに沸き立つ。

◆銀賞 B 部門 《Think (Desire)》《Think (Despair)》竹智こずえ(日本)

目にも心にも残像が残り続ける、説明し難い魅力があるポスター。人の姿とその身体から湧いた絶望(Despair)と欲望(Desire)は、身体より大きく膨らんでいく。個の心のありようを表現しながら、個をとりまく世界の困難と混乱にまで見る者の想像を導く。

◆銀賞 A 部門 《BEFLUGELT-インスピレーション》トアン・ヴュフー(ドイツ/フランス)フランスのグラフィックデザイナー、マルセル・ジャクノ(Malcel Jacno)氏へのオマージュとして、代表作に登場する羽のイメージから着想した形を、大判のポスターに広げた。3 色の印刷の絶妙な重なりが揺らぎと奥行を生む。文字を置かず、絞り込んだ色とフォルムだけで先達のデザイナーへのオマージュを伝えきる表現に、視覚を掴む力強さがある。

◆A.B 部門 銅賞作品について

銅賞作品には、表現の独創性や新しさが見られた。エリッヒ・ブレヒビュールとフェリックス・ファッフリのポスターは、展覧会の内容をビジュアルで見事に伝えている。トマシュ・ステルマスキとアグニエシュカ・ジェミシェフスカのポスターは、インパクトのある表現の新しさが衝撃的であった。文字を超えて視覚で誘い込む柏木美月のポスター、シンプルかつ力強いビジュアルだけで生命の力を伝える永井一正のポスター。作品本位で選考を行った結果、玉置太一の作品は2点が銅賞となった。なかでも《Understanding ADHD》は、ビジュアルの導きによってADHDを見事に伝えた。

◆U30+Student 部門 受賞作品について

B部門と同じくテーマ「Think()」でのデータ応募。SNS、格差、ジェンダー、家族、自分自身のことなど、若い世代からのテーマへの回答は、誰かに用意された手順では解決できない多様なメッセージで溢れている。審査員が「考える」ことを応募者から求められたようだった。賞決定の投票は何点かに集中するというよりも、全体として1,2票の得票作品に多く分かれたなかで、金賞となったフェン・ハンハン《Think(過保護)2》は、モノクロームで整理されたどこかユーモラスな表現だが、保護する者とされる者との関係や、伝わってくるメッセージは、見る者の立場が違えば異なるのかもしれない。

※2024 年 10 月 8 日、9 日に行われた第二次審査時の、5 名の審査員各氏による議論内容等をもとに、富山県美術館にてまとめました。

IPT2024 受賞作品決定の過程について

【第二次審查 1 日目(2024年10月8日)】

全入選作品の総見、A,B 部門の賞候補選出:

- ・A,B 部門の入選作 350 点に対し、全審査員が各 20 票を持ち、賞候補にふさわしいと考える 作品に投票。
- ・得票数にかかわらず、投票のあった作品を審査員全員で確認と協議。
 - 3票以上獲得した14点をまず賞候補に決定。
 - 2 票、1 票を獲得した作品について賞候補にふさわしいかを 1 点ずつ協議し、賞候補 40 点を選出。

(賞候補全 40 点の内訳:単作品=32点、3 枚組作品=3点、2 枚組作品=5点)

【第二次審査2日目(2024年10月9日)】

A, B部門、上位賞の選出:

・賞候補 40 点に対し全審査員が各 2 票を持ち投票。得票があった 9 点のうち、審査員の過半数票を獲得かつ 1 日目の投票で満票の 5 票獲得の①《世界は私たちのもの》シュペールテラン、②《(望まない)収穫物》ダーシャ・ボトルツェワ、③《P.A.N.G!》アトリエ・テア・ベッケ&ベハーへを上位賞候補として協議。グランプリ、金賞を決定。

A, B部門、銀賞の選出:

・上位賞選出の投票時に得票があった作品のうち、上位賞以外の6点に対し、各2票を持ち投票。過半数票を獲得した④《HUM人N》佐々木俊、⑤《Think (Desire)》《Think (Despair)》 竹智こずえ、⑥《BEFLUGELT-インスピレーション》トアン・ヴュフーについて協議を行い、銀賞に決定。

A, B部門、銅賞の選出:

- ・銀賞候補6点のうち、銀賞3点以外の3点を銅賞に決定。
- ・銅賞残り5点選出にあたり、受賞決定済を除いた賞候補作品に対して各5票を持ち投票。過半数票を獲得した5点を銅賞としてよいか協議。銅賞全8点を決定。

U30+Student 部門各賞の選出:

- ・入選作品 40 点のうち、審査前日に入選者本人より辞退の申し出があった 1 点を審査対象外とする旨、事務局より共有。
- ・U30+Student 部門の39点に対し、審査員が各14票を持ち投票。
- ・得票過半数の上位作品に対して挙手と協議にて、金賞1点、銀賞3点を決定。
- ・銅賞 10 点については、初回投票時に過半数票獲得作品全体から金賞、銀賞決定済の作品を除いた 5 点をまず銅賞に決定。受賞決定済を除く作品を対象に、再投票と挙手・協議にて、残り 5 点の銅賞を決定。

ディーン・プール氏 (第二次審査員、賞決定) 授賞式・開会式メッセージ (2024 年 10 月 11 日)

日本での第 14 回世界ポスタートリエンナーレトヤマ 2024 に、賞決定の審査員として招いてくれた富山県美術館に感謝します。

また、同じく第二次審査員をつとめた、ニッキー・ゴニッセン、浅葉克己、佐藤卓、三木健 にも感謝します。友情とともに、ありがとう。

私たちは共に、現代の過剰なまでに視覚情報に侵された世界におけるポスターの役割について、豊かで濃密な議論を重ねました。

ポスターはコミュニケーションの道具として強力なものです。視覚的にメッセージを伝えて、人々をさまざまなレベルで結びつける機能を持っています。

ポスターならではの能力でメッセージをすばやく効果的に伝え、そのメッセージを人間同士の文化的表現の一部である重要な要素にするのです。

ですから、問題は、私たち審査員が審査するにあたって、なにが基準となるのか、すばらしいポスターにはなにがあるのか、ということになります。

ポスターと鑑賞者の最初の接点は、目を通したものです。

ポスターの視覚的なデザイン、つまり色彩、タイポグラフィ、イメージ、レイアウト。これらが瞬時に私たちの注意を引き、知覚に訴えかけるのです。

ポスターはときに読むよりも見ることを好みます。一文字もないポスターもありますが、そのときに全てを語るのは視覚に訴える画像なのです。

最初の視覚的な訴えかけの次に、ポスターは私たちを感情のレベルで結びつけます。

すばらしいポスターは、「心を通しての感情の共鳴」を生み出すのです。

たとえば、ノスタルジー、誇り、連帯感などの感情を喚起したり。

また、共感に訴え、私たちに衝撃を与え、行動を起こす動機づけもするでしょう。

感情的に共鳴させるポスターの力によって、それはしばしば忘れ難いものとなり、なんということもない一枚の紙が希望の象徴になるのです。

最後に、ポスターは頭を通してなにかを伝えます、私たちの知性に働きかけるのです。

思考を強く呼び起こし、好奇心を鋭く喚起し、瞬時に複雑な思考の数々を伝えます。

文化的な目的で制作されたポスターは、特に、私たちの社会における多様な価値、政治的な様々の立場、時代の芸術運動の数々などを反映する、ある種の解説として働くことも少なくありません。

そのようなポスターは、人間的であるとはなにか、そして現代においてそれがなにを意味す

るのかにまつわる、私たちのものの見方が正しいのかと揺さぶりをかけてきます。

ときにポスターは囁き、ときにポスターは叫びます。

ポスターは装飾であるに留まらず、文化のなかの物語の担い手となり、一つの社会の遺産、 価値や人々の声を保存し時空を超えて知らしめるのです。

きわめてシンプルな形態でありながら、ポスターは目的を持った芸術です。

目に語りかけ、心に触れて、知性に訴えかける芸術です。

この数日の審査を通して多くのポスターを見てきました。

では、すばらしいポスターとは?

それは、物質としての存在を超えて、象徴的な残像として頭に残るポスターです。

どうもありがとうございました。

ニッキー・ゴニッセン氏 (第二次審査員、賞決定) 授賞式・開会式メッセージ (2024年10月11日)

第 14 回世界ポスタートリエンナーレトヤマ 2024 の国際審査員として、ここにいるのを大変光栄に思います。

私たち審査員は、この二日間、信じられないほど濃密で刺激的な経験をしました。グラフィックデザイナーである私たちは視覚的な生き物ですが、この審査の過程では、自分の眼だけでなく感性や直感などに導かれながら、ポスターの世界の奥深くに飛び込むことができたのです。

審査員同士の議論のなかで最も得るところが大きかったのは、常にそれぞれの審査員が互いに刺激し合えた点です。知識を出し合いますが、それよりもさらに重要なのは、感覚を共有できたことです。ポスターは審査員それぞれの疑問への導火線でした。「このポスターはなにを語っているのか?」「なぜこのポスターはこれほどまで深く響くのか?」。互いの議論を聞くのは楽しく、自分だけの視野を超えて、デザインの見方や考え方が広がりました。このようなやり取りを経て、熟慮と検討のうえでファイナリスト―賞候補の作品を選ぶに至ったわけです。

芸術的な質と並んで、本質的な、特に街の中でのポスターの「立ち止まらせる力」についても議論しました。ポスターは公共的空間の視覚的カオスの只中でただちに注意を引き、非常に短い時間でメッセージを伝える必要があります。よく創られたポスターはたとえ一瞬であっても、人々を立ち止まらせ、自らのメッセージを伝えるという独特の能力を持っています。

そのため多くのデザイナーは困難に直面します。つまり、明瞭性と創造性のバランスを正しくとらなければならないのです。一瞬で理解できると共に、深いレベルの興味も喚起する。 しばしばデザイナーは、そのようなポスターを作るという微妙なバランスを強いられます。 鍵となるのは、これらの要素のバランスを保って、視覚的な強い効果とメッセージの深さという双方から、そのポスターが賑わう公共の場で際立って注目されることです。

私たちが審査したポスターは、さまざまな重要テーマを語っており、多くは、気候変動、汚染、この惑星の脆弱性、言論の自由の重要性、特定の強力なシステムの覇権といった、喫緊の社会問題に眼差しを注いでいました。これらのポスターは芸術として素晴らしいだけでなく、私たちの社会の関心事と価値観を反映した、文化的表現のための強力な媒体としても働いています。単なる視覚イメージではなく、行動と内省を求める声であり、私たちの世界と未来を形成する事柄に関する視覚的な意見表明なのです。

U30+Student 部門にはテーマ「Think ()」が設定されました。皆が知る有名な言い回しに「我思う、ゆえに我あり」というものがありますが、ポスターは私たちが思っていることを様々な方法で視覚的に表現したものですから、学生をはじめとした応募者は非常に熱意をもってこのテーマに取り組んでいました。応募者から審査員が考えよ、と強く求められたのです。争いを考えよ、過剰な保護を考えよ、ジェンダーを考えよ、いろいろと異なった視点から考えよ、再生可能エネルギーを考えよ、世界の飢餓を考えよ、携帯電話が絶え間なく私たちに伝えることを超えて考えよ、つまり、アルゴリズムを超えて考えること、私たち自身のために考えること、を。

それでは、受賞作品についてのメッセージに移りたいと思います。

一つめの金賞は、サン・ナゼール劇場のための三点組、パリのアトリエ・テア・ベッケ&ベハーへの作品です。この三点組は、露わな感情と強さを巧みに混ぜ合わせ、本当に並外れた、心を惹きつける作品です。この組作品の中のそれぞれのイメージは、世界と宇宙全体の瞑想へと私たちを引き込み、鑑賞者の想像力にその非常に多くを委ねています。《P.A.N.G!》と題されたこのシリーズは、宇宙の無限に投げ込まれたような感覚を呼び起こし、あたかも人間としての私たちは遥かに大きい何ものかのほんの小さな一部分に過ぎないことを、思い出させるかのようです。

この形象は、大宇宙における私たちの立場をよく考えるように求め、私たちのコントロールできない様々な力があること、人間のちからの及ぶ世界の外にも様々なものがあると示唆しています。首(こうべ)を垂れ、知らざるもの、私たちが完全には把握して支配できないもの、それを尊重する必要があると思い出させます。

二つめの金賞はウクライナ、ダーシャ・ポドルツェワの《(望まない)収穫物》と題されたポスターです。本作は審査員に衝撃を与えました。荒廃をもたらすいくつもの戦争に、あまりに多くの人々が晒されている現代世界の過酷な現実を突きつけてくるのです。農民たちが自らの農地で働き、日常生活をおくる、そこへ巨大な爆弾が目の前に突き刺さる。はじめは、この柔らかい色彩と微妙で細いタイポグラフィのせいもあり、審査員全員がすぐに惹きつけられたわけではありませんでした。「押しが強い」ポスターではありません。しかし見れば見るほどますます強い衝撃を受けました。このイメージが捉えている、儚さがゆっくりと現実のものとなる姿、いかに普通の人たちの生活が考えられない出来事によって引き裂かれるか。それが力強い感情を湧き上がらせます。声高ではない激しさをそなえたこのポスターは、日常の脆さ、争いの瞬間ごとにいかにすべてが瞬時に変わってしまい得るかを思い出させるのです。

いよいよグランプリ。フランスのシュペール・テランの衝撃的なポスター《世界は私たちのもの! (À nous le monde!)》です。このポスターは思いがけない方法で私たちの注目を完全に惹きつけます。デザイナーとして私たちは、いままで見たことがないようなものを常に探していますが、《世界は私たちのもの!》は、審査員全員の興味を掻き立ててくれました。なぜこのポスターがこれほどまでに注目せずにはいられないのかについての解釈は審査員それぞれですが、個人的に私にとっては、その風景です。描かれたどこまでも続く道が私を誘い、新たな世界、希望の世界、新たな来るべき世代、変化の世界へとこの道を歩むよう促すのです。このポスターは行動を要求するかのようです、その未来を抱きしめよ、と。鮮やかで、粗い飛沫のような色彩が、柔らかい背景とコントラストをなして、力強い動性を生み出しています。息づき、可能性で溢れんばかりです。

このポスターはまさに、世界は私たちのものだと言っているのです。私たち皆、参加し、行動し、強さと決意をもって前進せよ、と求めているのです。

最後に、これら IPT2024 という場に集まった全てのポスターの意味深い重要性を考えましょう。これらによって、世界が富山に集まりました。それらには、私たちの悲しみ、懸念、夢、希望が、それぞれ込められています。

デザインの世界がここ富山に集っています。美術館の役割とは、私たちの惑星の鼓動を内包 するこれらの視覚表現を保存し、展示し、知らしめることにあるのです。

どうもありがとうございました。